

1. 協会の歩み

北海道ポーランド文化協会 役員名簿

(設立当時)

会 長： 今村成和

副会長： 遠藤道子

運営委員： 伊東孝之、大竹貞、小笠原正明、小林暁子、霜田千代麿、灰谷慶三、
長谷川洋行、藤原勲夫、本間富雄、三澤正博、和田完

事務局長： 吉田宏

監査委員： 方波見雅夫、相馬純吉

(2015年度)

会 長： 安藤厚

副会長： 小笠原正明、霜田千代麿

運営委員： 安藤むつみ、氏間多伊子、薄井豊美、大久保律子、尾形芳秀、栗原朋
友子、越野剛、小林美保、佐々木保子、高橋健一郎、富山信夫、塚本智宏、中島
洋、三浦洋、アグニエシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェプカ

事務局長： 佐光伸一

監査委員： 小林暁子、斎田道子

発行

北海道ポーランド文化協会

〒006-0006

札幌市手稲区西宮の沢6条
1丁目16-1-210 佐光方

電話・FAX 011-215-6696

samitsu0204@gmail.com

http://hokkaido-poland.com/

POLE

北海道ポーランド文化協会

創立25周年記念誌

2015. 8. 25



ポーランドの民族衣装で
祝賀会に参加した女の子

Happy 25th Anniversary !

祝 北海道ポーランド文化協会 創立25周年！



Tekst toastu pana Ambasadora Cyryła Kozaczewskiego podczas spotkania z Towarzystwem Hokkaido-Polska w dniu 3 listopada 2012 roku

Cieszę się, że mogę tu być dziś z Państwem i uczcić 25 rocznicę założenia Towarzystwa Hokkaido-Polsko w Sapporo. Gratuluję aktywnej działalności, która jest widoczna również w Tokio.

Postanowiłem jak najwcześniej przyjechać do Państwa, aby móc jak najdłużej współpracować z Towarzystwem podczas mojego pobytu w Japonii. Liczę na Państwa aktywność i zaangażowanie oraz nowe inicjatywy wzmacniające polską obecność na Hokkaido i w Japonii.

Gratuluję dotychczasowej postawy i życzę kolejnych lat współpracy z Państwem i z nowymi pokoleniami Polaków na Hokkaido.

Kampai!

ツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド 共和国特命全権大使の祝辞

本日、この場でみなさまとお会いし、北海道ポーランド文化協会の創立25周年を共に祝うことができまして、たいへん嬉しく思います。みなさまの実に活発な活動は、東京でもよく伺っております。その活動に対し、心からお祝いの言葉を申し上げたいと思います。

私がこちらに来て、一刻も早くみなさまとお会いすることにしましたのは、私が日本に滞在する間、できるだけ長くみなさまの協会と協力し合えるようにする

ためです。みなさまの精力的活動により、北海道と日本においてポーランドの存在を普及していただけますことを、大いに期待しております。



北海道ポーランド文化協会がこれまで築き上げてこられた地位に対しお祝いの言葉を述べるとともに、みなさま、そして北海道に住むポーランド人の新しい世代と共に、これからも協力し合い活動していくことを願っております。

乾杯！

2012年11月3日

創立 25 周年 記念祝賀会

2012年11月3日(土)、北海道ポーランド文化協会第26回総会・創立25周年記念祝賀会が、ニューオータニイン札幌の2F北星の間で賑やかに行われました。

運営委員会では一年前から、25周年は少し華やかに祝いたいと4人構成の「総会・祝賀会部会」を設け、出来るだけ多くの新旧の会員とポーランドの



方たちに集まっていたと準備を進めました。当日は会員ほか30人、ポーランド人は大人17人、子供

6人、そのほか特別参加者をあわせて50人以上が出席しました。その中には、釧路在住で最初のポーランド語の先生、カジミェシュ・コグトさんご夫妻=写真上:右2人=、その後長い間ポーランド語を教えてください、東京在住の熊倉ハリナさん=同上:左2人目、左端は筆者=など懐かしい方たち。新しいところでは、東京事務所の霜田英磨さんはじめ、今年一年間に入会された会員が6人。そしてこの9月に札幌コンサートホール Kitara の専属オルガニストとして来札したばかりのマリア・マグダレナ・カチョルさんなど、新旧うれしい方々が参加してくれました。

そして何よりの驚きは、この7月に就任されたツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国大使のご出席でした。お忙しい大使は当日の朝、新千歳空港に着き、祝賀会に出席して、2時半の飛行機で帰京のご予定で、それにあわせて急遽緻密な計画を立てました。当日の午前中は、大使に会いたいポーランド人が大勢ホテルに集まり、祝賀会まで楽しいひとときを過ごしたそうです。

総会と祝賀会の合間に、総勢50人余の日本・ポーランドの仲間が記念写真=前ページ=におさまりました。12時25分、定時に祝賀会開始。安藤会長



は挨拶の中で、この25年を振り返り、会の基礎を築いた方々、遠く

から駆けつけてくれた方々、新しく会員になった方々などを紹介。また設立当初からの趣旨である「文化の交流」を守りながら、着実に充実した活動を続けてきた協会の姿を語りました。

続いて特別のお客様ツィリル・コザチェフスキ大使のご挨拶で、大変驚いたことに、協会に対し、立派な額に入った感謝状が用意されていました。ポーランドには感謝状という習慣はあまりないようですが、日本とポーランドの交流の中で、感謝の気持ちの表し方が見事に融合したといえるかもしれません。大使の乾杯のご発声の後、賑やかに祝宴が始まりましたが、まもなく大使はみんなと握手を交わし=写真上=、名残を惜しみながら空港に向かわれました。



祝宴は楽しく進み、会話も盛り上がりました。後半のアトラクションは、安田文子さんのピアノ演奏で始まりました。ショパンの「ノクターン」「プレリュード」「英雄ポロネーズ」。いつ聴いてもショパンはいいですね。続いて25年の歩み。設立当初からの会員である富山信夫運営委員と小笠原正明副会長が、25年の思い出のあれこれを、懐かしい写真をスクリーンに映しながら語りました。

そのあとヨアンナ・クンツェヴィッチさんが「マイファニーバレンタイン」「ボディーアンドソウル」「枯葉」を情感を込めて歌ってくれ



ました=写真右=。そして最後に全員で「スト・ラト」を大合唱、大いに盛り上がりました。終わりに霜田千代磨副会長が、参加者への感謝と協会のこれからの更なる発展を願って閉宴の挨拶を述べました。

この祝賀会を準備には、多くの日本人・ポーランド人双方の大きな協力がありました。心から感謝申し上げます。目標をはるかに超えた多数の参加者、思いもかけなかった大使のご出席と感謝状、2時間がとても短く感じられたほどみんなが楽しんでくれたことなど、25周年にふさわしい祝賀会だったと思います。今後も地道に楽しく、充実した協会として活動していくことを心から願っています。

小林 暁子(総会・祝賀会部会)

写真:尾形芳秀

創立から26年刻んだ足跡に

「ポーランド文化功労章」 当協会が受章！



写真1 文化功労章授章式にて(左から)コザチェフスキ駐日大使、筆者、今村能氏、大竹洋子氏、佐藤忠男氏、ズドロイエフスキ文化・国家遺産大臣、上田美佐子氏、ロドヴィッチ前駐日大使、久山宏一氏
写真：マチェイ・コモロフスキ

去る2013年10月17日、ポーランド共和国より北海道ポーランド文化協会が団体として初めて「文化功労章」を受章しました。安藤会長の代理として大使館での授章式=写真1=に出席しましたので、概要を報告します。

授章式の前には、今春に日本で封切られるポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督による「ワレサ連帯の男」の試写会がありました。上映前、私は最前列のポーランド大使と並んで着席する前外務大臣の中曽根弘文氏の隣の席に案内され少々戸惑いましたが、授章式のことなど全く念頭にはありませんでした。

上映が終わると、ポーランド共和国文化・国家遺産大臣のボグダン・ズドロイエフスキ氏およびコザチェフスキ駐日ポーランド大使が壇上に上がり、「これからポーランド文化功労章の授章式を執り行う」と宣言されました。改めて少々緊張気味に推移を見守っておりますと、簡単な主旨説明のあと、まずシアターX(カイ)の上田美佐子氏の名が呼ばれ、壇上で大臣が「文化功労章グロリア・アルティス」という金メダルを彼女の首にかけました。ついで、佐藤忠男氏(日本映画大学学長)、大竹洋子氏(東京国際女性映画祭実行委員)、今村能氏(国立音楽大学、ポーランド国立歌劇場・フィルハーモニア客演指揮

者)の順で「文化功労章」の勲章がそれぞれの胸に留められました。

すると突然「北海道ポーランド文化協会」という司会者の声が聞こえ、正直まさかという驚きと、やっぱりという納得の感情が交錯する中、意を決して壇上へ向かいました。というのも、安藤会長からの出席要請のメールには、そのような儀式のことなど一切触れられていなかったからです。

壇上で同じように功労章を胸に付けて頂くと、会場から大きな拍手を頂きました。最後に、久山宏一氏(ポーランド語翻訳・通訳者)が受章して、文化功労章の金メダルは個人1名、勲章は個人4名と1団体が受章したという次第です。



写真2 勲章を胸に付けた筆者と「文化功労章グロリア・アルティス」受章の上田美佐子氏。写真右は勲章。

後ほどの授章理由の説明では、文化功労章はあくまでもポーランド文化の普及・交流に貢献した個人の功績を称えて授与するもので、団体に対して与えるのはこの制度始まって以来初めてということでした。授章理由としては「北海道ポーランド文化協会が25年を超える長きにわたりポーランドと日本の文化交流に果たした役割と功績はとて大きく貴重である」という主旨が述べられました。

授章式の後、受章者と挨拶を交わし=写真2=、いろいろな方からお祝いの言葉を頂きました。前駐日大使のヤドヴィガ・ロドヴィッチ氏も式に出席されており、とても丁寧なお祝いの言葉を頂きました。

その後、11月17日にシアターX主宰による上田氏の「グロリア・アルティス」受章記念パーティーに招

待され、その席で改めて上田氏に祝辞を述べる機会がありました。私と上田さんとは、4年ほど前に私の兄(副会長・霜田千代麿)を通じて接点ができ、兄からは、グロトフスキが逝去されたときにシアターXで開催された記念シンポジウムに、上田さんからご招待を受けたことがきっかけ、と聞いています。その後、国立能楽堂におけるヤドヴィガ・ロドヴィッチさんの創作能上演の際、およびご自身で企画された関連イベントなどでも何度かお目にかかり今日に至っています。

以上、授章式の概要を報告させて頂きました。

霜田 英麿(北海道ポーランド文化協会東京事務所)

初代事務局長

吉田宏先生を悼む

小笠原正明

北海道ポーランド文化協会(協会)の創設者の一人である吉田宏先生は、2003年6月19日にご逝去されました。北海道大学教授を退官されたのち旭川工業高等専門学校(現旭川大学)の校長になられ、その職を全うされてからわずか1年あまりのことでした。先生の存在は協会にとってまことに大きなものでしたが、先生もまたこの組織のことを最後まで気にかけておられました。

先生とポーランドのかかわりについては、ご自身が「クロー先生のことなど」という題で1990年1月のポーレ10号にエッセイを書かれています。1965年の3月にスウェーデン留学の帰途にポーランドに立ち寄り、ウッチ工科大学のクロー先生にはじめて会われました。ご自身の言葉を借りると、「ただ遊びに行くという当時としてはいさか後ろめたい動機で興味本位に訪れたポーランド」であったが、大勢の先生や学生の前で晴れがましい学術講演を行い、はじめて一人前の研究者として遇されたとのことでした。

おそらく中世ヨーロッパ以来の伝統だと思いますが、アカデミズムの世界では遠路はるばるやってきた同学の士を、セミナーと晚餐で接待するという習慣があります。クロー先生はそれを忠実に実行され

たのでしょうが、その時に、この少壮の日本の学者が豊かな才能に恵まれていることにすぐ気づかれたはずで、その後、クロー先生が北大の客員教授として家族とともに半年間札幌に滞在することもあり、先生とクロー先生の友情は、はたから見ても心あたたまるものがありました。先生が灰谷現会長や遠藤副会長とともに奔走され、1987年に協会の創設を果たした背景には、クロー先生とのこのような友情があったと思います。先生はその後7年間にわたって事務局長を務められました。

先生は、クロー先生に代表されるほんもののヨーロッパを深く理解し、また愛してもおられました。特に学問と芸術を尊敬し、礼節を重んじるポーランドの人々とのつきあいを心から楽しんでおられました。ヨーロッパの他の大国の人々と違って、やや内気でシャイで、文化的なおしつけがましさがなく、いいのだとも話しておられました。洗練された教養人であった先生は、ポーランドの人たちと心の深いところで触れあうことができたのだらうと思います。

協会のこれまでの活動には、先生のご性格が良く反映されていました。ポーランドの音楽、文学、歴史、美術、舞台、映画、学問などを愛する人たちが自らの意志で、それぞれのやり方で例会を企画し、形にとらわれない創意あふれる活動を展開してきました。先生ご自身の発案による会誌「ポーレ」は、協会のこのような活動をいきいきと伝えてきました。最近完成した15周年記念誌でポーレの抜粋を通読して、生前にこれをご覧になったら先生がどれほど喜ばれたことだらうと思いました。

精神的な支柱の一人であった先生を失って、私たちが感じる喪失感と寂寥感は如何ともしがた

いところがあります。しかし、一方では特定の個人の意志や指示ではなく、さまざまな人たちのさまざまなアイデアや献身的活動によって支えられてきたのが私たちの協会の特徴でもあります。先生の

ご逝去とともにポーランド協会は一つのステージを終えたこととなりますが、新しい世代が新しいステージに颯爽と登場することを願ってやみません。

第三代会長

灰谷慶三先生を悼む

安藤 厚

本会会長・灰谷慶三先生は、2006年7月6日、永眠されました。享年69でした。

先生は、初代・今村成和会長(1987-94)、遠藤道子副会長、吉田宏事務局長らとともに1987年10月の北海道ポーランド文化協会設立に尽力され、第二代・谷本一之会長のあとをうけて、第三代会長(2002-06)としてポ文協の発展に貢献されました。

灰谷先生は1936年10月10日函館市に生まれ、北海道大学文学部、早稲田大学大学院で学ばれ、東京大学教養学部助手を経て、1970-2000年まで北大文学部助教授、教授としてロシア文学の教育・研究に専心されました。

1979-80年にワルシャワ大学日本学科で教えられて以来、ことのほかポーランドを愛し、制約の多い時代に10人以上のポーランド人留学生を北大に招き、親身のお世話をされました。先生にお世話になった留学生は、スワボミル・シュルツさん(1977-81年北大文学研究科日本史学専攻に留学、現在ワルシャワ大学日本学科教授)をはじめ、世界中で活躍しておられます。協会創立15周年記念誌POLE(2003)には、小見アンナさん、ワタさん夫妻、アンナ・ボージェクさん、アレクサンドラ・モクシンス

カさんら、お世話になった留学生の寄稿が数多く載っています。

また、北海道大学放送講座「文明の十字路口—東欧」(1992)では「ポーランドの文学」を担当され、定年後も北大の全学教育・一般教育演習(フレッシュマンセミナー)で「東ヨーロッパの社会と文化」を担当され、ポーランド文化の紹介に努められました。

本会の活動を通じて、日本とポーランドの文化交流に尽くされ、1989-2000年まで全30期にわたったポーランド語講習会の運営には、奥様の洋子さんとともに特に心を砕かれました。灰谷先生との親交が縁で、1992年5月にはヘンリク・リプシッツ駐日大使、2000年3月にはワルシャワ在住のジャーナリスト松本照男さんを札幌にお迎えすることができました。私自身、先生のお誘いでポ文協に加わり、1994-95年にワルシャワ大学日本学科で教える機会を得ました。

創立15周年記念誌の発行は、灰谷会長の下での最初の大きな仕事でした。来年の創立20周年を前に、灰谷会長、佐光伸一事務局長の努力で、若い世代を中心に新たな活動を模索しているところでした。本年3月、小笠原正明第二代事務局長・現副会長が東京に移られることになり、灰谷会長から「送別会を」とのご提案があったのですが、時機を逸し、「夏には是非」と話していたところ、思いもかけずこのようなかたちで機会を失い、残念でなりません。

灰谷慶三先生の長年のポ文協へのご貢献に感謝し、あまりにも早いご逝去を悼み、心からご冥福をお祈り申し上げます。



創立15周年記念総会(2002.10.4)にて：前列左2人目から吉田さん、灰谷さん、遠藤さん、右端谷本さん

第二代会長
谷本一之先生の
一周忌によせて

安藤 厚

1994年から2002年まで本会第二代会長を務められた谷本一之先生は、昨2009年7月19日に逝去されました。一周忌にあたり改めて、会の活動への先生の多大なご尽力に深い感謝をささげ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

谷本会長の時代、会の活動はたいへん活発で、ポーランド語講習会(第17-30期)、ポーランド訪問旅行(第1回1994年9月、第2回1997年10月、第3回2001年8-9月)、池田町修学旅行(第1回1995年9-10月、第2回1996年10月)、創立10周年記念コンサート(1996年11月)など大きなイベントが次々と催されました。特に第2回ポーランド訪問旅行には谷本会長ご夫妻も参加され、総勢30人近くでワルシャワ、ジェラズヴァ・ヴォラ、ウッチ、クラクフ、グダンスクなどを巡り、たいへん楽しく思い出深い旅になったと聞きます。

谷本先生は、1958年に北海道大学大学院教育学研究科修士課程を修了、北海道学芸大学助手を振り出しに、北海道教育大学教授、同学長を歴任されました。バルトーク研究および知里真志保博士の下でアイヌ芸能の研究から出発され、ハンガリー、ジプシー(ロマ)、アイヌや、シベリア、カムチャツカ、アラスカなどの少数民族の音楽の研究で多くの業績を上げられました。1980年代には、20世紀はじめに樺太(サハリン)で写真機と蝋管蓄音機によってアイヌとウィルタ(オロッコ)の資料を収集したポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)の蝋管資料研究プロジェクトに参画、蝋管に録音された音楽資料の分析に携わられました。

本会会長をお引き受けいただけただけのもこのようなお仕事のご縁かと推測されます。毎年秋の総会で静かに座っておられた温厚なお人柄は今も深く印象に残っています。本会会長を退かれたあとも、多くの重要な職責を果たされる一方、ロシア、アラスカなどでのフィールドワークを精力的に進められました。つい数年前、北大構内の循環バスの中でたまたまお目にかかったときの若々しいお姿が今も鮮明に記憶に残っています。

谷本先生の早すぎたご逝去を改めて悼み、ご冥福をお祈り申し上げます。

初代副会長
遠藤道子先生を偲んで

三浦 洋

北海道ポーランド文化協会の設立当初から副会長をつとめられ、長らく協会の発展に尽くされた遠藤道子先生が、去る2011年11月24日にご逝去されました。93歳でいらっしやいました。

水戸出身の遠藤先生は東京音楽学校(現・東京芸大)で学ばれた後、ピアノ演奏家及び教師の道を歩み、戦後、北大に復職された夫君の良男氏、令嬢の郁子さんとともに札幌に移住されました。以来60年余りにわたって大学教育や個人レッスンの場で約3千人に及ぶ門弟を育てられ、今日、北海道が「ピアノ王国」と呼ばれる礎を築かれました。ポ文協の第二代会長をつとめられた谷本一之先生

(2009年ご逝去)も北海道大学教育学部で教鞭をとられていた時代の教え子で、谷本先生は就任あいさつの際、「私は遠藤先生の弟子ですので、ご命令に逆らえず、会長を引き受けました」とユーモアまじりに語られました。

遠藤先生は、往時の日本では顧みられることの少なかったショパンの音楽を普及する活動に情熱を傾けられました。日本ショパン協会北海道支部を設立され、ショパンを中心にポーランドの音楽を世に広められた活動は、道内はもとより、日本全体のピアノ音楽界を活性化しました。そのご功績により1986年にポーランド文化功労勲章を受章されたことは、先生の歴史的偉業といって過言ではないと思います。この受章が、1987年のポ文協設立によって一つの原動力になったことは疑いありません。

ポ文協の催しに出席された際には、社会主義体制下のポーランドで郁子さんと暮らした頃の思い出を懐かしそうに語って下さいました。名ピアニストの故ハリーナ・チェルニー・ステファンスカ女史がどのようにマズルカを教えたか、夫のルドヴィク氏は

どんな方だったか、クラフがどんな街だったか—記憶の泉から言葉がとめどもなくあふれ出てくるごようすでした。また、協会の創立 15 周年記念誌が完成した際には大変喜ばれ、「多くの方にお贈りしたいです」といって激賞されました。

大正7年生まれ先生は、ピアニストという文化的先端を行く“職業婦人”の道を進まれ、凜とした居ずまいをいつも保たれました。まさに、颯爽たる「大正生まれのモダンガール」です。ショパンを、そ

してポーランドを敬愛した先生の精神的背景には、幼少期にふれたモダンな大正文化がいつも薫っていたように思われます。

12月11日にご自宅の「遠藤道子記念音楽館」で営まれた音楽葬では、先生のレパートリーだった曲目などが郁子さんの手で演奏されました。

ポ文協に対する多大なご貢献にあらためて感謝申し上げます、謹んでご冥福をお祈り致します。

北海道ポーランド文化協会

～映画、音楽、料理まで多彩な活動続け20年～

三浦 洋

1980年代の日本では、今からは想像できないほどポーランド情勢が盛んに報道されていた。80年に始まったポーランドの自主管理労組「連帯」の運動、83年のワレサ「連帯」委員長のノーベル平和賞受賞は、東西ドイツ統一、旧ソ連の解体、東欧諸国の資本主義化にいたる東欧革命の序章だった。北海道ポーランド文化協会（ポ文協、会長・安藤厚北大文学部教授、会員85人）が設立された87年10月は、そんな東欧ブームの真ただ中だったのである。

しかし、私がポ文協と出合ったのは、政治とはほぼ無縁の場であった。89年、当時すでに伝説化していたワイダ監督の名画「地下水道」（1956年）の自主上映会があると知って行ってみると、中島洋さん（札幌・シアターキノ代表）が司会役、伊東孝之さん（現・早稲田大学教授、当時は北大スラブ研究センター教授）が解説役をつとめていた。今にして思うと、なんと豪華な上映スタッフだったのだろう。以前からショパンの音楽に傾倒し、少しずつポーランド語を学んでいた私は、かの国の文化にすっかり魅了されてしまった。

ポ文協発足時のメンバーではなく途中入会者の一人にすぎない私がポ文協の歴史を深く知ることになったのは、130ページにも及ぶ創立十五周年記念誌の編集作業に携わったときである。15年間に開催された51回の例会では映画、演劇、音楽、美術、文学、歴史、料理、舞踊など、ほぼポーランド文化を網羅するテーマが親しみやすい形で扱われ、会員外の一般市民も多数参加してきた。同時

に、ポーランド語講習会が30期まで継続され、受講者の中にはポーランドに留学した人、青年海外協力隊員としてポーランドに派遣された人も少なくない。

なぜ「日本ポーランド協会北海道支部」ではなく、本道だけの独立組織が成立し、こんなにも多彩な活動を継続してこられたのか。今考えてみると、二つの要因が思い当たる。

一つ目は、本道には伝統ある北大文学部ロシア文学科、北大スラブ研究センターなどポーランドと縁の深い研究施設があるほか、ピアノ音楽の分野で活発な活動を続ける日本ショパン協会北海道支部があること。ほかにも映画、演劇、美術、科学などの分野でポーランドに関心を持つ人が少なからずいたことから、ほとんど奇跡的に、道内だけで十分に組織が成立しえたのである。

二つ目は、ポ文協が純粋に「文化」の組織であったこと。もし政治やイデオロギーにかかわる組織なら、とうに路線対立で分裂するか解散していたことだろう。してみると、名称の中にある「北海道」と「文化」がポ文協存続の二本柱だったことになる。

十五周年記念誌を発刊して5年。20年を過ぎての活動を展開しているポ文協は、今月17日に創立二十周年記念ピアノコンサートを開催する。名曲演奏とともに、ショパンに影響を与えたミツケビチの詩などが朗読されるので、言葉の響きとピアノの響きが織りなすポーランド文化の響きを多くの方に味わって頂きたいと思う。
（みうら・ひろし）